

新たなエルサルバドルの希望の旅へ

灼熱の太陽と勤勉な人たち、子どもたちのひと懐っこい姿が、エルサルバドルの最初の印象でした。1974年日本体育大学の中南米遠征にバスケットボールのチームの一員として参加しました。私の高校生活は、「世の中」の変革が必要と考えていて学園紛争で大きく失望しました。大学では、全く「世の中」を考えず「バスケットボール部活動の中でどうやって生き残ることができるか」だけを考え生活していました。この中南米遠征に参加したことが、私の将来を大きく変えました。体育学校で青年海外協力隊員が現地の学生の中に溶け込んで指導する姿が、強く印象に残りました。



2度目の訪問は、青年海外協力隊としてです。昔は、休職制度がなく三重県津高校の教諭を退職して1976年の夏にエルサルバドルに赴任しました。憧れの協力隊員となり最初の任地は、首都サンサルバドル、そしてサンミゲルに配属されました。この2年あまりの体験は、それからの私の生き方を大きく変えることになりました。「～だから～できない」という言い訳は、成立せず「～でも～できる」という生き方を学ぶことができました。

当時のエルサルバドルは、見えないところで大きく変化していた時代でもありました。「戒厳令」などの単語は私の中にありませんでしたが、大国の間で揺らぐ「国」は、豊かな自然、助け合う人々の中で少しずつ、表に現れてきました。

このサンミゲルでの生活体験は、多くの先輩隊員とエルサルバドルの教育関係者、地域の人々から文化、考え方、生き方を学ぶことができました。今でも、本当に感謝しています。



エルサルバドルでは、「豊かさ」「教育」「国」の在り方など、学べば学ぶほど「組織」「経済」「外交」など興味が湧いてきました。これによって、東京で再度、教員になり生徒たちをタイのカンボジア難民センター、ソフトボール部を東南アジアに遠征、生徒会役員をフィリピンの修道院へ、今は、大学教員になり学生と途上国に何度も出かけています。とにかく若い人に実践、体験を通し同じような変容をしてもらいたいのかも知れません。2005年にJICA 緒方貞子理事長賞を頂いたのが、私の人生で一番意味あるものでした。



3度目の訪問は、20年ぶりで内戦後のエルサルバドルを家族を伴っての訪問でした。内戦前の隊員の20名近くは、エルサルバドルの方々と結婚していました。日本に戻ったり、国外に逃れたり、戦乱の中で生き抜くことは、言葉に尽くせぬ苦労があったと思います。まだ、内戦の雰囲気が残る中、先輩のホテルに泊まり勤務地サンミゲルまで車で行きました。私は、平和の大切さを実感していましたが、子どもたちは、すべて日本と違う環境なので正直、戸惑っていました。

4回目は、2019年1月JICAの50周年記念式典でした。40数年ぶりに多くの先輩と懐かしいエルサルバドルの友人にも会うことができました。エルサルバドルは、その姿をどんどん変えています。どうかあの笑顔の勤勉な安定した人々の生活が続き発展することを願ってやみません。この写真を撮った数か月後に先輩がなくなったと知らせが来ました。このJICAの式典参加が、40数年会えなかった先輩に最後会わせてくれたのだと思います。





パラアスリート （日体大キャンパス） 2018

私の旅はこれで終わりではなく、私たち内戦前の協力隊員だけではなく、新しいエルサルバドルの若者と日本の若者が双方で活躍できる場、社団法人を設立したいと考えています。皆さんご協力よろしくをお願いします。

高田幸一（たかだ こういち）氏

日本体育大学卒業後、三重県立白山・津高校体育教諭後の経験を経て、1976年、青年海外協力隊・エルサルバドル共和国にて活動。帰国後は再び各地の教育機関にて指導教鞭を執る。その後、全国高等学校体育連盟バスケットボール専門部長、全国高等学校国際教育研究協議会会長、青年海外協力隊技術専門員を経験。2021年現在、三幸学園スイーツ&カフェとウエディング&ブライダル専門学校長、青年海外協力隊技術専門員、(NPO)国際教育協会常務理事、神奈川大学・日本体育大学非常勤講師、ものづくり大学入試課参与、日本体育大学同窓会副会長・東京都同窓会会長。